

天声人語

開幕を延期できないか、いや無観客試合ではどうか。関係者がギリギリまで開催の道を探るも、万策尽きて大会中止に迫り込まれる。今春のセンバツの話ではない。1918（大正7）

年夏の全国大会のことだ▼春夏の高校野球史において、戦争以外の理由で中止になつた唯一の大会である。発端は、富山から広がつた米騒動だ。米価高騰に対する不満の訴えが暴動と化し、大阪では夜間外出禁止令が出される事態に。代表14校の組み合わせ抽選も済んだ後に中止が決まつた▼「各地暴動甚だしく大阪亦然り。我軍の遺憾やる方なし」。その年、連覇を狙つていた愛知一中（現・旭丘高校）の野球部史の一節だ。球児の落胆ぶりを訴え、後輩に奮起を求める。「奮へ奮へ来年度の選手よ」▼きのうの本紙地域面には、監督や球児の意氣消沈の言葉が並んでいた。「あると信じて練習してきた」と埼玉の選手が肩を落とし、「見えない敵に負けた」と長崎の監督が悔やむ。出場32校が発表された1月下旬には想像できなかつた結末である▼感染拡大で中止されたのは野球だけではない。剣道、柔道、卓球、体操など高校スポーツの全国大会が軒並み取りやめになり、合唱や吹奏楽のコンクールも幻と消えた。3月に照準を合わせて練習を重ねてきた全国の高校生たちには失意の春となつた▼すぐには気持ちの整理がつかないだろう。だが積み重ねた努力は決して無駄にはならない。今回の無念を心の糧として、奮へ奮へ全国の高校生たちよ。